

宿帳に大字落々と記す秋
 川魚子を摺るといふ秋の題を得つ
 北そよと吹けば有磯の荒るゝ秋
 白山にて
 灰降りし雪掻きぬ小草秋萌えて

冬

時 候

立 冬 出羽人も知らぬ山見ゆ今朝の冬

小 春 品川の海静かなる小春かな

山中の積木に休む小春かな

日の出見て山下りし里の小春かな

畚の中雀来て居る小春かな

冬之夜
 小者つれて島長ぶりの小春かな
 宮の大樹伐ると噂の小春かな
 埋れ木を掘る里人の小春かな
 日頃通ふ駄馬米を積む小春かな
 小春日の里にお助一け普請かな
 佐渡でいふ國中平小春かな
 冬の夜や果樹の園主が論議稿
 一器の食明日を思ふや宵の冬

冬之夜に火の見の下の焚火かな
 短日に馬休ませて田家かな
 牛羊の牧短日の歩みかな
 短日に御者の眠れる車蓋かな
 短日やさそはれ出しかげ詣り
 寒さ
 かしこまる易者の前に人寒し
 寒林の貧寺焼けたり僧の留守

刈跡の葭原寒し水溜 ✓

鞍とれば寒き姿や馬の尻 ✓

伊豆の海や大島寒く横はる ✓

観魚庵商賣甚だ振はず

釜の銘寒雉といふも寒さかな

餘生の計を聞て

返りごととすべき文ある寒さかな

俳三昧雜詠二句

難行を天下に誇る寒さかな

寒燈の下や俳魔の影もなし
物捨てに出で、干潟の寒さかな

行田

萬葉の歌に後なき寒さかな

師竹に別る

秀衡と芭蕉君にも寒さかな

人首と書いて何と讀む寒さかな

鶯子に對す

君淋しと思ふ頃われも寒さかな

狐 吊りて 驛亭 寒し 山十勝
果樹の國に父祖の田を守る寒さかな
旗手山の松寒し裸山の中

冬ざれ 冬ざれ や砂吹き つくる 潘柱

寒の入 鮭鱒の孵化のさかりや寒の入
佐渡振り を賑ふ 白や寒の内

師走 船人は 碇綱 買ふ 師走 かな

席上某妓に與ふ

句を望む君と師走のいとまわれ
茶の匂ふ枕も出来て師走かな
築き替へし竈二つまで師走かな
橋開きありて師走の花火かな
年の暮 ほしきもの年も暮れぬる新世帯
桶落ちて立つ庖刀や年の暮

春隣

種揃へしておこすなり春隣
春待や宿病に堪へて憂ふ事

天文

時雨

山門に時雨の傘を立てかけし
置捨てし床几の端の時雨かな
哀れなる人に時雨の句を申す

筠軒先生に對す

詩話畫論しぐるゝいとまなかりけり
絲を繰る音の庇のしぐれかな
しぐるゝや香に立つ温泉の洗ひ物

酒田本間氏別野

雪

木もなくてしぐるゝをかし外廓
 枯木原に雪積んで居る月夜かな
 罵るや戎を縛す雪礫
 軒落ちし雪窮巷を塞ぎけり
 後宮の夜半に雪折聞えけり
 森高う雨雪になりぬ静かさよ
 雪搔いて礫酬いし門邊かな
 干す舟の雪搔き落す日晴たり

枕邊に積む雪奇しく目覺めけり
 片富士の片そぎや雪の峰つゞき
 遠野勢夜半に著きぬる雪明り
 門の雪いつ繋ぎけん馬のをる
 雪あらぬ片谷に温泉の小村かな
 一廓の灯や溪の雪發電所
 首綱で積引き來る深雪かな
 雪除の高さを牛舎三棟建つ
 雪チラく岩手嵐にならで止む

途中即吟三句

雪晴に海見ゆる我が行く先きに
野ひらけ行く晴雪に風立てり
雪晴れの鶏犬我を怪ひる

野邊地海岸即景

潮汚れせし雪黄なる埠頭場かな
雪模様ふ々にや山のたゞずまゐ
望み絶えし吹雪に便りある日かな
燈臺を見し戻りなる吹雪かな

休む間にふゞきつのりぬはたと止む
何處來て里に落ちたる吹雪かな
自然火

山姥の雪籠りせし灯なるべし
稻架立てしに雪早し猪威し銃
一度降りし雪忘れ菜や冬山家
墜道の飯場石焚く雪籠り
雪明りしてこの隈や四季櫻

霰

我善坊に車引き入れふる霰✓
 凧に霰降り來る曇りかな✓
 打返し藁干す時の霰かな
 金華山志せば冬になる霰
 カラくな藻草に溜る霰かな
 帆渡りの島山嵐霰かな
 途中三湖を見る追ありて降る霰
 海靜かなるに石切る音や霰降る

霜

日暮里に下宿屋を探り霜柱
 道と見えて人の庭踏む霜柱✓
 生垣や人佗びて庭に霜柱✓
 小野の道刈田の霜に日和かな
 とさ朝の花火の音や霜日和
 霜日和稻掛けし運河堤かな
 霜凧に濃き紅葉見ゆ向ひ島
 中尊寺
 苔青き踏むあたりにも霜柱

積葉の枯木の霜に雀かな

寒

日吉社

寶塔に檜の風のみぞれかな
吹きまはす浦風に霞寒かな

冬 日

赤門の下に汐さす冬日かな
冬日落つまこと梢の鴉島

風

風や皆くねりたる磯の松

風や瀧の上なる大悲閣

木枯や吠捨てある新墾田

風や白樺の魔火さそふ時

風の山裏紅葉温泉畑に

冬 空

冬空や舟行の果に日暮るゝ

冬空や津輕根見えて南部領

冬空の下に黄澀の濃き田かな

北風

北風に糞落し行く荷馬かな

北風や磧の中の別れ道

北風に魚鹽の便りなかりけり

歸り來ぬ人北風に立つ日かな

北風に比良のそゝれは舩のなき

冬の月

送別の月寒く酒を強ひにけり

寒月に雲飛ぶ赤城榛名かな

寒の雨

簀圍ひの魚の潛みや寒の雨

上の山泊りにせうぞ月寒き
寒月や笞刑の人の放たれて
拆過ぎて後犬行くや冬の月
寒月や雪束の間の毘獲物
煤流るゝ水と草原冬の月

地理

枯野

追うて逃げる鴉かしこき枯野かな
野は枯れて蘆邊さす鳥低きかな
とぼくと薬負ひ行く枯野かな
索然と枯野に落す入齒かな
吹きさらしに馬一つ行く枯野かな
野は枯れて目にしるき山や噴火烟
臥牛山の麓の高野枯れにけり

讀史

大戦に死所を得ず哀れ野は枯れて
地に下りし鳶に引かる、枯野かな
行李柳田に返し堀る枯野かな

冬 枯

冬枯や壑き捨てたるこのあたり

冬 山

鐵露に對す

君に遇ふ牡鹿の山の眠る下
寺絶えてたゞに尖れり冬の山

氷

流れたる花屋の水の氷りけり
 麦青き上に掛樋の氷柱かな
 火の映る北上氷りそめにけり
 山の池の緑に薄き氷かな
 鳶鳥咬み合へる落つ田の氷
 関として碎氷船も横はる
 上解けの氷に藻草緑なり
 東風吹いて一夜に氷なかりけり
 鯨走りして間なき海の氷る日や

冬 川

冬川や湯田の蟹石出ずなりぬ
 大きなる嘴鳥をるや冬川原
 すたれたる運河も見えつ冬の川
 橡胡桃冬川筋の立木かな
 冬川や那須の高根のそがひ見ゆ
 冬川と水塚や處一の宮

冬 田

土埋めて汽車道作る冬田かな

冬海
 底曇りの雲の動きや冬の海
 工場も建つや水田の冬の驛
 濱砂を波の蹴上げや冬田原
 燈籠も巨刹も道や冬田原
 美豆の牧一木も見えず冬田かな
 椽欄高く椽欄寺見えて冬田かな

人事

神の旅 多羅葉の大樹けやけき神の留守
 吹輪祭 鍛冶祭や向打殿は何の守
 遠方の鍛冶主見えぬ鍛冶祭
 吹革祭 秀真が鑄型何ならん
 臘八 臘八の旦峨々たる聲音かな
 臘八の門に汝の到りけり
 冬構 羽黒山にて

冬構の中に鳥居の裸かな

雪圍 牛吼をする犬のをる雪圍ひ

冬籠 ものうくて二食になりぬ冬籠

盗まれし牛の訴訟や冬籠

集を見て我句樂しむ冬籠

繡工の足も縫ふ夢冬籠

避寒 大浪の打つ暖かき避寒せり

舟寄せて漁翁の見舞ふ避寒かな

籠り乗る避寒の宿の馬かりて

防風林風致を添ふる避寒かな

海明き避寒の宿の山丸し

針山をかりて夫婦が避寒かな

火鉢 あぢきなく灰のふえたる火鉢かな

酒を置いて老の涙の火桶かな

手をかざせば陸魔の襲ふ火桶かな

爐開 爐開いて灰つめたく火の消えんとす

火燧 火燧貼つて日脚餘れる中々に

亡き人の向ひをるよな火燧かな
火燧の間去ることもなく用足りぬ
火燧にてあるじがまねの書見かな
乗りて來し馬を火燧に見つゝをる

山梔子に對す

喜ばしき時も淋しや置火燧
風呂欲しう思ひつゝ、宿の火燧かな

懷爐 毎日に曆見る老が懷爐かな

いつよりか温石先生といはれけり
不覺なる病に寝じと懷爐かな

圍爐裏 戯れに秋皎に與ふ

念者ぶりの句をさゝやきて爐邊かな
鼻焦がす爐の火にかけて甲羅酒

即事

爐の灰の降るに硯をいとひけり
朝から酒の爐邊の二人捨て置け

楯

楯崩れせし音朝に響きけり
松楯を積むや門邊の日に匂ふ

雲軒は「もつきり」趣味をと迫る

炭

椀中の酒火の如し楯いきれ
股凹に燃えべりのして根楯かな
鷺の羽を宿の筥や楯埃
若者をどやす楯火のあるじかな
物積んで奥ある家や楯明り
家ぢうを烟らす風の楯火かな
煙草盆に小さき炭の火消えざる
鋸鈍く炭挽いて居る石の上
枯葛は燃えてもいぶる粉炭かな

寺大破炭割る音も聞えけり
 炭市の日を待て絹も賣らまくす
 蒲團 綿厚き蒲團に父孫妻子かな
 貧しさのやもめ蒲團を著せ申す
 母人の藁打たす藁蒲團かな
 蒲團二つ敷けば大佐渡小佐渡かな
 千里距る別れに敷きし布團かな
 藪の音と月明り蒲團展ぶる時

足袋

白足袋にいと薄き紺のゆかりかな
 角構へ小城下ながら足袋屋かな
 紐足袋も義足の主の棲ずれや
 毛布 綱ゆるき毛布包みの荷物かな
 寒山居にて
 百日目横たはる赤き毛布かな

綿入

見佛の問法の時の綿子かな、
綿入の肩あて尙も鄙ひたり
袖狭きも知らず奥人綿子かな

紙子

箔のやうに白き跡見ゆ紙子かな
下さまの紙子好を問はれけり
素紙子や商人ながら狂言師

獵

獵況を里より三度報知かな

麥蒨えて獵期の芒蒨らずあり
初獵や威しの銃と知る山邊

阪鳥

さかどりの一陣を張る處かな
蘆を鳴る風にさかどり待れけり
さかどりも國替の時になくなりぬ

網代

網代持てば鴨も時折拾ひ來て

柴漬 沼尻の川の流れや柴漬くる

風邪 素茗の妹に手料理の禮をいひやる

風邪ひかぬまじなひの句を返しかな

煮凝 鮫汁に昆布なめらかな凝りやう

納豆 この家に木佛立たすや納豆汁

納豆打つ寢覺くを又寢かな

蕎麥湯 蕎麥湯する背ろの音は鼠かな

野施行 野施行や一本榎野に立てる

寒紅 つけさして老けはくし寒の紅

水漬 水漬を白紙に拭ふ机邊かな

ひ 胼の手を耻らふ心つくしかな

寒稽古 寒稽古 子弟の骨を鍛ひけり

卯酒 有馬去りし口なれの卯酒もせず

煤掃 煤掃の捨ててもやらざる枯しのぶ

煤を掃く日織りのつまる機のあり

煤掃の焚火や竹の爆く音

煤ヒまひ沼夕榮の藏の戸に

古曆 火の患水の患も古曆

餅搗 一白は黄なる餅つく貧しさや

機仕舞ふ一間廣さや餅薙

梅三分咲く餅搗の日取かな

翁を擁して湖南の衆の餅搗きぬ

姥等 前ばかり姥等の顔に白きもの

大原雑魚寝

月の夜の蔀おろして雑魚寝かな

動物

千鳥

素紙子に繪を物しけり千鳥など
燈臺に双棲の君や鳴く千鳥
女名を呼ぶ岩のあり鳴く千鳥
楯に似し岩めぐり鳴くは千鳥かや
離れ家離れ岩あり飛ぶ千鳥

水鳥

水鳥のばさくと立つ夜網かな
不忍や水鳥の夢夜半の三味

水鳥や小村も見えて陣の外
 内浦になだらかな島や浮寝鳥
 流れあさる舟皆下りつ浮寝鳥
 牧牛の群れ来れば水鳥も輪に
 海までの水路に偽砲浮寝鳥
 石垣に鴨吹きよせる嵐かな
 築山や鴨這ひ上る芝の上
 雪の日や鴨場の御狩せられけり

鴨

鶴 鷓

沼移りしてつどひをる鴨小鴨
 望む松凍てつく星や鴨の鳴く
 山越しに窟のあるや三十三歳
 三十三歳住持が貧の窟まで
 桑老木倒れしもあり三十三歳
 冬 雁
 蜺かく舟も見えずよ冬の雁
 束ね藻の冬に雁来る磯田かな

鷹

鷹に遠く逃げて藁屋の雀かな ✓

鯨

浦人や鯨の油 幾日汲む

河豚

河豚の文天雪降ると物しけり
鵜の巢見えて河豚釣る岩間かな

生海鼠

砂の中に生海鼠の氷る小さくよ

牡蠣

海鼠あり庖厨は妻の天下かな
海鼠突き大凡の敷を讀みにけり
古への梟の形を海鼠かな
千百里漂ひ来る海鼠かな
牡蠣殻や磯に久しき岩一つ ✓
牡蠣船に大阪一の艶話かな
牡蠣舟を出で、天満の雪景色

植 物

山茶花

山茶花や日南に氷る手水桶

山茶花にあるは寒の降る日かな ✓

山茶花の花の田舎や納豆汁 ✓

山茶花や謫居の跡の寺一字

茶の花

茶の花や洛陽見ゆる寺の門

提灯に茶の花しるき夜道かな

返り花

御溝水歸り咲く花枝々に

本山に上る十年や返り花

簀ぬぎし晴れを思ふや歸り花

日和見の漁師が家や歸り花

落 葉

落葉掃いて文庫の訴訟安堵かな

そゝけたる梢銀杏の落葉かな

松立つて漁村の銀杏落葉かな

蘆の中の水に溜れる落葉かな

落葉して湖水の漁に疎きかな
左右にある殉死の塚の落葉かな

羽黒山南谷にて

朴落葉俳諧の一舎残らまし
立岩の裏も神ある落葉かな
陣の跡地を走る風の落葉かな

紅葉散

蓮枯れて寺の紅葉もなかりけり
船頭の社案内や散る紅葉

大山は酒所なり

奥の灘は紅葉散りしく門邊かな

冬木立

土手道や酒賣る家の冬木立
車置いて城市に遠し冬木立
門前に舟干す冬木日和かな
椀程な塚の上にも冬木かな
ありといふ小屋にも出でず冬木立
真上より瀧見る冬木平かな

壘干す冬木の下や驛日和
 大木戸に似し門ありて冬木かな
 坊守の脂削る溜冬木かな
 地すべりの時の瀦水や冬木立
 宮冬木砂持の通ふ道となり
 枯柳 枯梅の下に芝の鴨
 唐崎の吹きさらし畑の柳枯る

水仙 鉢淺く水仙の根の氷りつく
 水仙と唐筆と賣る小店かな
 三體の観音残る水仙花

枯菊 菊枯れて庭にも一つ藁塚を

蕪 留錫のお物好みや蕪汁
 俳陣のうしろに据る蕪かな
 ぶりくに似し長かぶら面白や

鞍づけの蕪が落ちそな馬が行く
蕪作る大百姓や聖村
産の祝ひ又の祝ひやかふら汁
葱 修忌の蕪参らす葱も一束ね

冬牡丹

積葉の三つある庭や冬牡丹
地に柑子垂れて牡丹も冬を咲く

冬薔薇

思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇
冬薔薇月山鍛冶の下りて居り

枯 蘆

枯れくや蘆の名残りの二三本
堆き砂の寄りけり蘆枯れて
防戦に焼かれし村や蘆枯るゝ

草 枯

草枯に染物を干す朝日かな
立て捨てし簾のからびや草枯るゝ

刺の木のあらはに草の枯れにけり
枯木 草枯の長づゝみ蜜柑山のあり

狐狸圖

月一つあるも怪しき枯木かな

行田

入口や地城の跡の枯銀杏

枯茨 赤き實や櫻が下の枯茨

干菜 古塀に鼠の上る干菜かな

新年

時候

元日や寺にはひれば物淋し

元日の袴脱ぎ捨て遊びけり ✓

元日の屏風隠れに化粧かな ✓

天文

初日 初日さす朱雀通りの静さよ

人事

蓬菜 蓬菜や海老かさ高に齒朶隠れ ✓

動物

初鶏 参候す大手の鶏のはじめかな

嫁が君 はこの暗き忍び姿や嫁が君 ✓

碧梧桐句集終



每册此印

大正五年二月一日印刷
大正五年二月五日發行

定價金六拾錢

著者 大須賀 續
發行者 東京市麹町區有樂町一丁目一番地 羽山仁三郎
印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 植田庄助
印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發行所 東京市麹町區有樂町一丁目
(丸の内三愛二十一號館内)
佛書堂
電話本局二一三三番
振替東京二四一七番

俳書堂主人述

俳句のすゝめ

非賣品

菊半載
六十頁

全一冊

往復はがきにて
申越次第

進呈す

□「俳句のすゝめ」は俳句を弘めんがため、俳徳の一般より説き起し、作法の大綱を示し、尙ほ古今の俳書に就て解説したる小冊子なり。

□未だ俳句を知らぬ方々は此の「俳句のすゝめ」を読み給はれ。

□忽ち俳句を作らんかの心動き、成程自分にも出来ぬことはないの信念を生ずべし。

子規遺稿

俳書堂藏版

五書合本 全一冊 四六判布裝箱入 總紙數千七百頁 定價金參圓

子規句集…………… 虛子碧梧桐共編

子規歌集…………… 伊藤左千夫編

子規小品文集…………… 高濱 虛子編

子規小說集…………… 高濱 虛子編

子規書簡集…………… 高濱 虛子編

縮合 本刷 俳諧大要

縮刷發行 菊半紙總九ポイント新組 總布裝金文字入箱入 定價金壹圓

(俳諧大要) (俳人蕪村) (四年間) の四書は正岡子規氏が俳句の綱要

を説明したる書にして正さに俳諧の正道なり。

以上の四書を通讀せば、俳句の作法に通曉するの傍、元祿、天明、明治の三盛期の特色を了解し、能く俳句上の見識を立つる事を得べし。

本書發行以來數萬部を印行し、舊版既に用うるに由なく、大正五年一月、全部の改版を斷行し、此の縮刷新本を發行せり。

正岡子規著

新傾向句の研究

著 河東碧梧桐

俳書堂藏版

菊半截三百八十頁
總布製上製箱入

定價金六拾錢

碧梧桐氏の唱へ出だしたる新傾向句の主張は、俳句界に一大革命を招來し、全國に亙りて忽ち新傾向派の大運動となり、殆んど全俳壇を風靡したるや、即ち今や新傾向にあらざれば眞の俳句にあらずと云ふの有様なり。
そも、俳句の新傾向とは何ぞや、是れ本書の主題にして碧氏はその全幅の主張を本書に傾注し、汎く天下にその所信を喧傳せんとす。

俳句の研究

俳書堂編

第五版

菊判六百頁布裝箱入

定價金壹圓五拾錢

□第一篇
一般俳句に關する研究

□第二篇
一句の研究

□第三篇
一家の研究

□第四篇
俳話

□第五篇
俳評

□第六篇
増補

本書は子規派の俳人が熱心に俳句を研究したる結果を網羅す。
俳句界空前の大参考書にしてまた實に空前の大冊なり。

俳諧馬の糞

高濱虛子著

第三版

菊列本紙三百二十頁

定價金八拾錢

本書は著者が八年に亙りて起草したる俳諧上の諸作物を取捨増訂し、ほゞ其の序を立て、易より難に赴くを得せしめたるもの。假に子規先生の「俳諧大要」を以て俳諧の總論と見做さば、此の書は即ち之を俳諧の各論と見做して讀むべきに似たり。先人未だ道破せざりしもの甚だ多し。俳句家必讀の名著なり。

合本 蕪村句集講義

諸大家輪講

合本

蕪村句集講義
蕪村遺稿講義

春之部

子規鳴雪碧梧桐
紙裝三百七十頁

合本

蕪村句集講義
蕪村遺稿講義

夏之部

子規鳴雪碧梧桐
紙裝四百五十頁

合本

蕪村句集講義
蕪村遺稿講義

秋之部

子規鳴雪碧梧桐
紙裝四百六十頁

合本

蕪村句集講義
蕪村遺稿講義

冬之部

子規鳴雪碧梧桐
紙裝五百二十頁

(附)講義索引類題蕪村全集

全四册箱入

定價金貳圓四拾錢

新修歲時記

中谷無涯編

春夏秋冬 全四冊

袖珍天金布裝
箱入每冊千頁

每冊金壹圓參拾錢

一、本書は古往今來唯だ一つある「大歳時記」なり。(彼の「葉草」の如きは論ずるに足らず。「年浪草」と云へども本書一度出て、其の要を失ひたり)。
一、四季「季題」の數壹萬以上を算し、新古を通じて従來の歳時記に見る能はざるもの甚だ多し。

一、各季題の「異名」「古名」「方言」並びに「種類」等、悉く之を網羅し、
一、各季題の「例句」「證歌」あるもの、必ず之を引例す。
一、季題の配列は五十音順の「辭書體」に依り、且つ完全なる「索引」を添ゆるを以て、従來の歳時記を繰くが如き不便を感ずることなし。
一、また太陽曆の月次を逐ひ、天文、地理、宗教、人事、動物、植物の區別に従ひ、頗る詳密を極めたる「季寄せ」を附録としたり。

新撰
袖珍

俳句季寄せ

俳書堂編

改版發行

袖珍全一冊
二百六十頁

定價 金貳拾錢

□これまでありたる「袖珍俳句季寄せ」はすでに數萬部を印刷して廣く世に行はれ其の原版亦磨滅して用ゐ難く依て新たに本書を編纂して前書に代ゆ。

□本書は前書に比し季題の數大いに増したり然も陽曆を土臺として俳家のために輕便と實用とを旨としたり一つに俳家諸君の活用を望む。

本合

春

夏

秋

冬

撰規子岡正

四季合本 全一冊

菊半載四百八十頁
總布裝上製箱入

定價金六拾錢

正岡子規氏が選みたる唯一の句集。

俳句の選集、元祿に「猿蓑」あり、明治に「春夏秋冬」あり。俳句は元祿に初まり、中頃天明の一盛時ありといへども、明治に至りて再び大に興れり。

元祿を代表するものは「芭蕉」と「猿蓑」にして、明治を代表するものは「子規」と「春夏秋冬」なり。

本合

續

春

夏

秋

冬

撰桐梧碧東河

四季合本 全一冊

菊半載五百五十頁
總布裝上製箱入

定價金六拾錢

本書は「春夏秋冬」以後の俳句界を代表するものなり。

集中の句々皆洗練せられ、殊に碧梧桐氏に於てのみ見ることを得る超絶的の傾向を示し、巻を通じて清新一點の塵氣をとどめず。

今度「春夏秋冬」と同じく四季を合巻し美冊となし非常の廉價を以つて諸君に提供す。

本合
新 春 夏 秋 冬

撰 城 洋 東 根 松

四季合本 全一冊 定價金八拾錢

菊半載八百頁
總布裝箱入

本書は明治俳句の黄金時代を代表する撰集なり。

集中の句、精緻婉麗、ひたと天然に接して一草一木の微を探り、しかと人情の機を捉へて、俳家心中間一髪の詩興を道破したり。此度冬之部の撰愈成りこれを上梓すると同時に、春夏秋冬四季四冊を合巻し、美装して且つ價を廉にして發行す。

刷縮
子 規 句 集

版 藏 堂 書 俳

縮刷發行 定價金參拾五錢

菊半載二百五十頁
總布裝上製箱入

河東碧梧桐 高濱 虛子 共 編

子規子歿後その句集を編むは故人が二大高弟たる碧虛兩氏の雙肩に荷へる責任なりき。

本書は兩氏が慎重に審議して編纂するところ、明治四十二年開版して以來已に數版を重ねたるを、今度俳家の便利を思ひ縮刷新装して發行したる次第なり。

故人春夏秋冬

大須賀乙字編

春夏秋冬 全四冊 菊半載六百五十頁 定價金壹圓

「故人春夏秋冬」は元祿より天明に亙り、古來の名句を類題したる唯一の句集なり。古來故人の句を集めたる書多しと雖も、いづれも、玉石同架にして取るに足るべきものなし。子規が古句を讀むべきことを力説したるは何故ぞ。俳句に上達せんとするには、能く古句に親しみ、古人苦心の跡を尋ねるを以て最捷徑とすればなり。

俳諧三佳書

子規虛子編

第六版 菊半載二百六十頁 定價金參拾錢

正岡子規曰。(俳諧三佳書とは)猿蓑、續明鳥、五車反古の三書なり。猿蓑は元祿の粹を抜きたる者、吾人の始めて眼を開きたるは實に此書の賜なり。後二書は天明前後に在りて比類無き好句集にして、吾が天明なる新俳想を攫取するを得しは全く此二書の媒介に因る。三佳書と名づくる所以なり。

新釋 奥の細道

三宅邦吉著

第二版

上装四六版
百二頁

定價金五拾錢

「奥の細道」は芭蕉が東山北陸二道を遍歴したる旅行日記にして、此の旅行は當時に在ては、常人の能く企て及ばざる大旅行たりしや論なし。江戸を立つて美濃に停まるまで、行程實に六百里を註す。而して「奥の細道」の文章の高雅閑寂なる古往近來比儔なしと云はざるべからず。

此の書、註釋詳密、考證正確、國文註釋書の模範と稱せらる。

お
ら
が
春

俳諧一茶著

大正
校訂

俳諧名著文庫第一篇

一茶自筆
挿繪八葉

定價

金五拾錢

「おらが春」は俳人一茶が文政二年中の日記なり。

(一)一茶が俳句の大技量。(二)一茶が清貧。(三)一茶が仁慈

(四)一茶が哀傷。(五)一茶が信仰。(六)一茶が田舎趣味。

皆此一冊の「おらが春」に依つて窺ひ知らる。

併書堂
初山書店

藏 版 時 報

無 代 進 呈

- 「藏版時報」は書籍目録でございます。
- 「藏版時報」は書籍購求案内でございます。
- 「藏版時報」は有益なる、又興味深き雑誌でございます。
- たゞ一枚のハガキにて御申越下さらば、最近の藏版時報は時を移さず、皆様の机上に郵送さるゝでございます。

357
115

終

